

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

登場人物表

- ・稲葉 音 (17) (30) 高校二年の女子高生
- ・柳 源一 (67) 定年退職をした臨時教師
- ・三宅 咲 (17) 音の親友
- ・斎藤 聡太 (17) 音のクラスメイト
- ・山本 沙織 (44) 音のクラスの担任
- ・山下 文枝 (72) 音の祖母

- 生徒 A
- 生徒 B
- 女子生徒 C
- 教員 A

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

○道・朝

制服姿の稲葉音（17）、一人で歩いている。

音の声「この町にいると自分は外の世界とは全く無関係に思える。数年後自分がどうなっているのか、どうなりたいのか、そんな事を考えるのは何よりも後回しなのだ」

後ろから、

咲の声「音！」

音、振り向く。

制服姿の三宅咲（17）走ってくる。

音の声「でもなぜか、自分は将来絶対幸せになっているという自信だけはあある」

咲、音にわざとぶつかる。

音「痛いよ」

笑っている二人。

咲「これあげる」

咲、手に持っていたタンポポを音に渡す。

音「なにこれ」

笑って受け取る。

歩く二人の後ろ姿。

音の声「そんな高校二年の夏だった」

○教室

生徒たちが話していたり、歩き回っていたりとざわざわしている。

窓側の席に座っている音、二列隣の斎藤聡太（17）と目が合う。

視線をすぐに逸らす音と聡太。

音の後ろに座っている咲、その様子をニヤニヤしながら見ている。

前のドアが開き、山本沙織（44）入ってくる。

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

沙織 「はい、みんな座ってー」

沙織に気が付き、席に座る生徒たち。

教壇に立つ沙織。

沙織 「みんな夏休みはどう？」

頬杖をついて窓の外を見ている音の姿。

音の声 「この学校の夏休みには『サマースクール』という一週間の

登校期間がある。来なくても罰則はないが半強制的なものだ」

教室の座席の方を見る音。

いくつか空席がある。

音の声 「でも実際、旅行やなんやで来ない人もいる」

気まずそうに話し始める沙織。

沙織 「早速、今年のサマースクールなんだけど……」

沙織の方を見る音。

沙織 「先生、事情があって明日から実家に帰らなくちゃいけなくな

りました……」

ざわつく生徒たち。

窓の外を見る音。

沙織 「なので！別の先生に来ていただくことになりました」

○道

早足で歩いている柳源一（67）。

音の声 「『サマースクール』には担任によって当たり外れがある」

○学校の前の道

早足で歩いている柳。

音の声 「みっちり勉強させられるクラスは外れ。ほとんど何もせず

騒いでるクラスは当たり」

柳、曲がり角で誰かと肩がぶつかる。

振り返る柳。

女性の声 「すいませ……先生……？」

柳、不思議そうな顔をする。

○教室

生徒たちが喋っていてざわざわしている。

沙織、腕時計を気にして落ち着きのない様子。

咲「先生、まだ来ないんですか？」

沙織「もうそろそろいらっしやるはずなんだけどなー」

前の扉が開く。

沙織、生徒たちが一斉に前の扉を見る。

ニコニコして教室に入ってくる柳。

音の声「あの瞬間、この教室の生徒たち全員が思った」

音の耳元に顔を近づける咲。

咲「(ささやく) 当たりだ」

教壇に立つ柳。

柳「すいません、遅れてしまいました。この度このクラスのサマー

スクールを臨時で担当させていただく柳源一と申します」

ニコツと笑う柳。

柳をじっと見る音。

○教室

自由に歩き回ったり、話したりしている生徒たち。

その様子を教壇でニコニコしながら見ている柳。

音の声「案の定、当たり前だった」

窓際で座って話している音と咲。

咲「山本先生、身内で不幸があったらしいよ」

音「え、そうなんだ」

咲「うん、ついこの前言ってた」

音「咲、先生と仲良いもんね。私てっきりどっか旅行にでも行くの

かと思った」

咲「(笑いなながら) 音は、相変わらず先生嫌いだなー」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

音「そういえば咲、もう引越しの準備とかしてるの？」

咲「(笑って) まだだよ。だって東京行くの10月だよ？」

音「そっか……いいな東京」

窓の外を見る音。

音の顔を見る咲。

チャイムが鳴る。

柳「はい、じゃあみんなお疲れさん。気をつけて帰るんだよ」

柳をぼーっと見る音。

咲「音！私、裕一君のところ行ってくるから先帰っててもいいよ！」

音「お！さすが積極的。いいよ待ってるよ」

咲「ほんと？そんなかからないと思うから！」

音「うん。頑張ってる」

ニコツと笑って拳を握って見せる音。

咲「うん」

咲、同じようにやって見せる。

走って教室を出て行く咲の背中を見つめる音。

○屋上

音、景色をぼーっと見ている。

屋上の扉が開く音がする。

振り返ると柳の姿。

慌てて背を向ける音。

柳、音の横に来る。

柳を見ないようにする音。

柳「あれ、君二年B組の生徒だよね？」

音「あ……はい、こんにちは」

気まずそうにする音。

柳「いやーみんな元気だね。やっぱり若い」

音「あ、はあ……」

横に並んで景色を見ている二人。

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

柳 「(笑って) 私はもう70近いから」

音 「……」

柳 「この学校も変わってないね」

音 「あ、あの……友達と約束してるので帰ります。さようなら」

音、軽くお辞儀をして去って行く。

柳 「気をつけて。さようなら」

去って行く音の背中を見つめる柳。

○校門前

音、暇そうに待っている。

咲、走って来る。

咲 「音ー！ごめん、お待たせ！」

歩き出す二人。

音 「どうだった？」

咲 「一緒に勉強する約束した！」

音 「やるじゃん」

咲 「まーねー」

目の前を歩いている柳に気が付く咲。

咲 「あれ、柳先生じゃない？」

柳の後ろ姿を見る二人。

咲 「(大声で) 柳先生ー！」

柳、声に反応して後ろを振り向く。

音 「(慌てて) ちよつと、咲」

咲 「いいじゃん、いいじゃん」

咲、手を振って柳の方へ走り出す。

○道

柳、咲、音の三人で並んで歩いている。

楽しそうに話す柳と咲。

音、つまんなそうにしている。

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

咲 「先生が来てくれてよかったー」

柳 「(笑って) そう言ってくれるとありがたいね」

咲 「先生、子供とか孫っているんですか？」

柳 「いるよ。孫は今小学六年生」

咲 「へえー」

興味なさそうにしている音を見る咲。

咲 「そーだ！先生、私学校に好きな子がいるんですけど、どうしたら付き合えると思いますか？」

パツと咲の方を見る音。

音を見てニコツと笑う咲。

柳 「はあー青春だねー。でも僕に恋愛相談はしない方がいいよ。もう年寄りだからね」

咲 「えーでも、人生の先輩じゃないですか。奥さんいるんですか？今でもラブラブですか？」

咲、ニヤニヤしながら柳の顔を見る。

柳 「いやいや」

下を向いて微笑みながら首を横にふる柳。

咲 「またまたー」

柳の顔を見る音。

柳 「じゃあ、僕こっちだから」

柳、立ち止まり左側の道を指差す。

咲 「あ、じゃあ。さようなら！」

お辞儀する咲の斜め後ろで、無言でお辞儀をする音。

柳 「さようなら」

柳、背を向け歩いて行く。

柳の背中を見つめる咲と音。

○道

音と咲、二人で歩いている。

咲 「いやー柳先生いい人そうだったね」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

音「そう？」

咲「先生嫌いの音でも仲良くなれんじやない？話してみないとわかんないよ？」

音「私は別に……それに裕一君のこと話しちゃってよかったの？」
咲「え？」

音「ほら、学校に好きな子がいるとか……」

咲「(笑って) あー、平気でしょ！柳先生だから話したんだよ。それより、音はどうなのよ」

音「どうって？」

咲「聡太君だよ！」

音「別に何もないよ」

咲「とか言っちゃってー！今日も朝、目あってたし！脈ありだと思うけどなー！」

音「そんなんじゃないから！」

咲「(なだめるように) そんな怒んなくてもいいじゃん」

音「怒ってないし……」

咲「まあいいけど！じゃあまたね！」

手を振って右に曲がって行く咲。

音「うん、バイバイ」

音、手を振り返す。

一人で帰る音の後ろ姿。

○音の家・音の部屋

ベッドで寝ている音、太陽の光で目を覚ます。

近くの目覚まし時計を見ると時刻は午前10時40分。

○同・リビング・キッチン

山下文枝(72) 椅子に座って読書している。

音、眠そうに階段から降りてくる。

音「お婆ちゃんおはよう」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

音に気が付く文枝。

文枝「あら、音ちゃん起きたの。今日は学校休みなのかい？」

音「うん、土曜日だから」

音、キッチンでお茶を入れ、飲みながらリビングに来る。

リビングのテーブルにある紙を取る。

音「今日の買い物メモこれ？」

文枝「そうそう、お願いね。いつもありがとう」

音「ううん、いいのいいの」

○音の家の前

音、自転車に乗り勢いよく漕ぎ出す。

音の声「私は祖母と二人暮らした」

○道

音、自転車を漕いでいる。

風で髪がなびいている。

音の声「両親は仕事の都合で東京にいる。東京で一緒に暮らそうと言われたけど私はなんとなくこの町に残った。高齢な祖母のために家のことはできるだけ私がするようにしている」

音、少し離れたバス停で時刻表をじつと見ている柳を見つける。

自転車を止めて、目を細めて柳を見る。

音、また自転車を漕ぎ始めるがすぐに止まる。

音「(ため息)」

○バス停

腕時計と時刻表を照らし合わせ、首を傾げる柳。

音の声「(後ろから)あの」

柳、後ろを振り向く。

音、柳の目の前に立っている。

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

音「その時刻表、30分ぐらいズレてますよ」

柳「(戸惑い)あ。え、そうなの?じゃあまだだいぶ時間あるなー」

腕時計を見る柳。

音、立ち去ろうとする

柳「教えてくれてありがとう」

音、立ち止まる。

× × ×

咲との帰り道。

咲「柳先生、いい人そうだったね」

話している咲の姿。

咲「話してみないとわかんないよ?」

× × ×

音、振り返る。

音と柳、目が合う。

戸惑う柳。

○バス停1

ベンチの両端に座っている音と柳。

ベンチの横には音の自転車が止めてある。

音、下を向いている。

柳「いやーこの町も全然変わってないな」

音「(柳の方を向く)……前にも来たことあるんですか?」

柳「30年前はここで教師やっててね。もう数年前に定年退職した
んだけどまた学校でお手伝いさせてもらえるってことで戻ってき
たんだよ」

音「先生って何で先生になろうと思ったんですか?」

柳「(笑って)んー、何でかって聞かれると難しいな」

音「(下を向き)……あの、失礼なこと言ってもいいですか」

柳、音の方を見る。

音「私、学校の先生って嫌いです」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

柳「……」

音「先生なんてあの小さな箱の中で王様になりたいだけだと思いません。自分よりも弱い家来を何十人も従えて優越感に浸って、思い通りにいかなかったら叱りつけ箱の中で支配し続ける。そして口を揃えてこう言うんです。『みんなに立派な大人になって欲しい』って」

音、我に返り柳を見る。

音「(目を逸らす) ……すみません」

笑い出す柳。

音、不思議そうに柳を見る。

柳「確かにそうかも知れないな」

音「え……」

柳「(遠くを見て) 君の言うとおりに、僕もそうなのかな」

音「……」

音の声「馬鹿だった。自分で言ったくせに、どうしようもないほど申し訳なく思った」

柳「あ、来た来た」

バスが遠くの方に見える。

柳「じゃあまた。君がたくさん話してくれてよかった」

立ち上がって荷物を持つ柳。

音「……」

音の声「正直、なぜかはわからない」

音、急に立ち上がる。

音「あの！」

柳、振り向く。

音「あの……ついて行ってもいいですか……」

音の声「勝手に口が開いた」

バスが止まり、乗車扉が開く。

○バスの中

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

乗客はほとんどいない。

二人席の窓側に座る柳。

通路を挟んで反対側の二人席の窓側に座る音。

二人とも、景色を見ている。

音の声「行き先もわからないまま私もバスに乗った。ずっと住んでるこの町の景色もいつもと違って見えた」

ふと、音を見る柳。

音、窓から外をじっと見ている。

○バスの中

バスが止まる。

柳「(音に)降りよう」

音、柳に続いて降りて行く。

○バス停2

バスから降りてくる二人。

音、周りを見渡す。

目の前に霊園がある。

音「ここって」

柳「行こうか」

音、霊園の方に歩いて行く柳について行く。

○霊園

線香立てから煙が立っている墓石の前で、持っていた荷物から綺麗なスターチスの花を取り出す柳。

音、その様子を後ろで見ている。

柳「すまないね、こんなところにわざわざ」

音「あ、いえ……私が勝手についてきたので……」

柳「これは妻の墓だね」

音「……」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

花を供える柳。

柳「これは私と妻が好きな花なんだよ」

音「スターチス……」

柳「お、よく知ってるね」

柳、目を閉じ手を合わせる。

それを見て、音も目を閉じて手を合わせる。

音の声「せめてもの罪滅ぼしだったのかも知れない。見知らぬ墓の前で目を閉じ手を合わせた」

○バス停 1

バスから降りてくる柳と音。

柳「なんかすまないね」

音「いや……こちらこそすみません」

バスが発発する。

柳「じゃあまた」

音、お辞儀する。

去って行く柳の背中に向かって、

音「……先生！」

柳、振り向く。

音「私も学校に好きな人がいます！でもどうしたらいいかわかりません！」

柳「（微笑んで）全力で青春を謳歌するべし！一生に一度の人生、悔いなく自分の信じる道を突き進むのみ！」

音に背中を向け去って行く柳。

柳の背中を見つめる音。

○音の家。リビング・夜

テーブルで夕飯を食べている音と文枝。

音、何かボーツと考えている。

その様子を見る文枝。

文枝「どうかしたかい？」

音「(ハツとして)ん？なんでもないよ」

文枝「そういえば咲ちゃんもうそろそろ東京行くんだっけ？」

音「(食べながら)あーうん」

文枝「音ちゃんは東京行かなくていいのかい？」

音「(笑って)何言ってるの。東京なんて行きたくないよ。それに私が東京行ったらお婆ちゃん一人になっちゃうよ。寂しいでしょー」

食べる手を止める文枝。

文枝「音ちゃん。頑張って自分に正直に生きなくちゃいけないよ」

音「……わかってるよ。ごちそうさま」

食器を持ってキッチンの方へ行く音。

音を心配そうに見る文枝。

○音の家・音の部屋・夜

音、机に座ってぼーっとしている。

○回想(数週間)・教室

聡太と音、二人きり。

聡太「……俺、稲葉のことが好きだ。もしよかったら付き合っ
て欲しい」

頭を下げる聡太。

音「……ごめん、そんな急に言われても」

聡太、顔を上げる。

聡太「いつになってもいいから、返事を聞かせて欲しい。……じゃあ」

教室を出て行く聡太。

取り残された音。

咲、入ってくる。

咲「お待たせ」

咲、ぼーっとしている音を見る。

咲「音？なんかあった？」

音「ん？ううん！何でもない。帰ろ」

咲「やったー！明日から夏休みだー」

教室を出る二人。

○現在・音の家・音の部屋・夜

音、意を決して引き出しから便箋を取り出す。

夢中になって書き始める。

真剣な音の顔。

○道・朝

歩いている音と咲。

手にタンポポを持っている音。

音、手に持つタンポポを見上げながら、

音「咲、本当に東京行くの？」

咲「本当について？え！なにもしかして寂しいの？」

からかう咲。

音「……」

咲「平気だよ、東京なんて電車ですぐだよ？いつでも会えるよ」

音「別に寂しくないし！」

咲「（笑って）素直じゃないなー」

歩く二人の後ろ姿。

○教室

ざわざわしている教室。

音の声「あつという間にサマースクール最終日を迎えた」

教卓でニコニコしながら様子を見ている柳。

音「あれから柳先生とは特に話してはいなかった」

窓際で外を見てぼーっとしている音。

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

咲の声「音？」

音「(振り向く)ん？」

咲「なんか今日ずっとそんな感じだね。なんかあった？」

音「いや？なんか眠いだけ」

チャイムが鳴る。

柳「みなさん、お疲れ様でした。サマースクールは今日で終わりです。残りの夏休みを存分に楽しんでください。では、さようなら」

荷物を持って教室を出て行く生徒たち。

生徒A「やっと終わったー！先生、ありがとうございました！」

生徒B「先生バイバイ」

柳に手を振る生徒たち。

ニコニコしながら手を振り返す柳。

柳、生徒たちに残り教室を出て行く。

教室には音、咲、聡太の三人だけ。

音「咲、今日は先に帰ってていいよ」

咲「え、何で？」

音、教室を出ようとする聡太を見つけ駆け寄る。

音「斉藤くん、話があるんだけど……屋上にきてくれる？」

その様子を見る咲。

聡太「わかった」

教室を出て行く聡太。

音の方によってくる咲。

咲「そう言うことかー。音も積極的になったなー」

感心している咲。

音「だから、先に帰ってていいよ」

咲「いいよ待ってるよ！あとで話聞きたいし」

音「(俯いて)……ごめん今日は先に帰って」

咲、心配そうに音の顔を覗き込む。

咲「……音？大丈夫？」

音「帰って、お願い」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

音、バックを持って早足で教室を出る。

咲「音！」

音の背中を心配そうに見つめる咲。

○屋上

一人、待っている聡太。

音、やってくる。

音「……いきなりごめんね」

聡太「いや……」

沈黙する二人。

音が何かを言おうとした瞬間、

聡太「この前のことだよね」

音「……うん」

気まずい雰囲気の二人。

音、聡太の目を見る。

目が合う二人。

○咲の家・咲の部屋

咲、部屋に入ってきて鞆を机に置く。

椅子に座り、何か考えている様子の咲。

鞆の外ポケットに便箋が入っているのに気づく。

○職員室

窓からじっと景色を見ている柳。

○屋上

音と聡太が向かい合っている。

音、頭を下げる。

音「ごめん」

音、顔を上げる。

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

音「私、他に好きな人がいるの」

○咲の家・咲の部屋

便箋を開いて読む咲。

便箋の文字と共に、

音の声「咲へ。いきなりごめんね。だけどどうしても伝えたいことがあるの。私、咲のことが好き。友達以上に好き」
便箋を読む咲の真剣な顔。

○屋上

音しかない。

俯いている音。

音の声「こんなこと急に言われても困るよね」

空に鳥が飛んでいる。

それを見つける音。

音の声「でも、伝えないと悔いが残るって思ったの」

鳥を目で追いながらフェンスに近づいて行く。

音の声「自分勝手な私をどうか許してください」

○咲の家・咲の部屋

便箋の文字。

音の声「咲には最後まで素直でいたかった。今までありがとう」

咲の真剣な表情。

咲「音……」

○学校・廊下

早足で帰って行く聡太の姿。

聡太とすれ違う柳。

聡太を目で追う。

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

○屋上

フェンスの手前でしゃがみ込む音。

音の声「咲が東京に行く前日に手紙を渡すこともできた」

顔を埋めて泣き始める。

音の声「でもそうしなかったのは、覚悟、諦め、希望、いろんな思
いが混ざった結果だった」

柳、屋上にやってくる。

泣いている音にそっと寄り添う。

音、顔をあげる。

音「……先生、私最低です。ずっと大好きだった親友を傷つけて……
失いました……」

泣きながら話す音。

柳「そんなことない。君はよく頑張った。立派な青春真っ只中だ」

泣いている音と音によりそう柳の後ろ姿。

音の声「幼い頃から先生が嫌いだった私にとってあの屋上での柳先
生はただただ頼もしく偉大だった」

空を飛んでいる鳥。

音の声「まるで全てを知っているかのようにだとさえ思うほどに」

○町の景色

音の声「あれ以来、柳先生とは一度も会っていない。私はこの町を
一度離れ、大学に通った」

○学校・廊下

誰もいない。

チャイムが鳴る。

音の声「そして」

○教室

教卓に立っている牧野音 (30)

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

音の声「この町で教師になった」

音「はい！じゃあみんな気をつけて帰ってねーさようなら」
生徒たち「さようならー」

教室を出て行く生徒たち。

ふと、仲がいい様子の女子生徒二人組をぼーっと眺める音。

女子生徒C「先生！さよなら！」

音「(ハツとして) さようなら！気をつけて帰んなよー」

誰もいない教室。

音の声「咲とは今でも親友だ」

反転して黒板に向かう音。

黒板の隅に「先生からの一言」というスペースがある。

音の声「最高の結末ではなかったかも知れない。けれどそれでも親友でいてくれる咲は私にとって大切な人に変わりはない」

そのスペースに「青春真っ只中！存分に楽しもう」と書く。

音のケータイが鳴る。

見ると、咲からのメール。

咲「柳先生、去年亡くなったって。」

音、顔をあげ黒板の文字を眺める。

○職員室

荷物をバックに入れて帰ろうとする音。

教員A「あれ、牧野先生もう帰るんですか？」

音「はい、行くところあつて。お疲れ様です」

教員A「お疲れ様です」

音、職員室を出て行く。

○学校の前の道

曲がり角で誰かと肩がぶつかる。

音「すいませ…先生…？」

振り返ると柳。

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

お互いに振り返り目が合う音と柳。
不思議そうな顔をしている柳。

○学校の入り口

階段に座って楽しそうに話す音と柳の姿。

音の声「十三年前の柳先生に会った。サマースクールのこと、咲とは今でも親友だということ、そして、教師になったこと。すべてを話した」

柳「いやー、まさか未来の教え子に会うとはなー」

柳、腕時計を見る。

柳「おっと、もうそろそろ行かないと」

立ち上がる音と柳。

柳「じゃあ。十三年前の君たち生徒に会ってくるよ」

音「……先生」

柳「どうした？」

音「ありがとうございます」

頭を下げる音。

顔を上げると柳の姿はない。

立ち尽くす音。

○霊園

音、「柳家」の墓石にスターチスの花を供える。

目を閉じ手を合わせる。

○道

一人で歩く音の後ろ姿。

音の声「人も町も景色も変わった。ただこの町が好きだということ
はあの頃も、そして今も変わらない」